

米国ジャーナリズムにおける「プレス独立」理念の形成

—— シャドソン、カプランの研究の再検討から ——

橋 本 晃

はじめに シカゴデイリーニュースの「独立」宣言

シカゴ初のペニープレスとして1876年創刊、その約10年後から第一次世界大戦中まで全米一の部数を誇る新聞だったシカゴデイリーニュース（Chicago Daily News）の発行人兼編集長、V. ローソン（Victor Lawson）は20世紀初め、創刊のころの自らの新聞の党派性（partisanship）からの訣別とそうした編集方針、論調に対する周囲の冷ややかな眼について次のように綴っている。

その当時、ペニー新聞に対して存在した偏見について、今日、理解するのは困難である。1セントで売っている新聞に人々はあまり期待していなかったし、過熱気味の党派性の強い（partisan）新聞の時代、こうした新聞はいかがわしい政治団体または読者の劣情に訴えるものとみなされた。貨幣すらわれわれの敵だった。ペニー硬貨はほとんど流通していなかったのだ。われわれはフィラデルフィアの造幣局から1セント硬貨を大量に取り寄せ、当地に流通させねばならなかった¹。

ペニープレスといっても、19世紀後半の創刊であるシカゴデイリーニュースはその40年ほど前の1830年代、ニューヨークで初めて登場した1セント売りの廉価な新聞のセンセーショナルリズムとは似ても似つかない、落ち着いた、品位ある（decent）紙面づくりを旨としていた。地元の殺人事件でも抑制の利いた報道（display of decent restraint）を行ったし²、広告欄も正直、誠実をモットーに制作した。すなわち、売薬（patent

medicine）はその効果が自社内の専門家によるテストで証明されてからでなければ広告の掲載を決めず、最終的に掲載を断ったことによる損失は年間数十万ドルにも上った³。こうした報道・経営姿勢を貫いたにもかかわらず、相変わらず続いた1セント新聞に対する周囲の冷たい眼に、ローソンはため息まじりの回想をすることとなる。

ローソンの嘆息はいずれ、同じく市場に財政的に依存し、党派性の強い新聞からの訣別を標榜するペニープレスでありながら、シカゴデイリーニュースと1830年代ニューヨークのペニープレスの紙面の違いはどこから来たのだろうか。単純に数十年の時の経過とともに怪しげな売薬の広告や警察裁判所（police court）関係の犯罪記事が時流に合わないものとされ、読者の需要もなくなってきたのか。市場に依存する商業新聞も成熟し、「読者の劣情に訴える」ような、派手な見出しが目立つかつてのペニー新聞とは別種のものに進化したのだろうか。もし、そうであれば、その進化、すなわち落ち着いた紙面と品位（decency）を可能にしたものは何だろうか。1830年代と1870年代の間には深い断絶があるのか。

しかし、たとえば19世紀末のニューヨークでは1830年代ペニープレスの直系の子孫ともいえるべきピュリッツァー（Joseph Pulitzer）とハースト（William Randolph Hearst）のイエロージャーナリズムが盛期を迎え⁴、その一方で、やはり落ち着いた紙面と品位を旨とするニューヨークタイムズ（the New York Times）が存在した⁵。19世紀後半、末にも並存していたとみられる2つのジャーナリズムの関係はどのようなものだろうか。断絶か、それとも、一見してわかるセンセーショナルリズムは伏流水のように地下深くに潜り込んでいき、両者の間にはなお、絡まりあった地下茎がはりめぐらされているのだろうか。

記者 (reporters) が19世紀末、革新主義的思潮の追い風に乗って自らを専門家 (professionals) と規定していったとの説には、すでに一定の合意がある。

南北戦争終結後の復興期 (the Reconstruction Era, 1865-1877) を過ぎてはなお、記者を取り巻く厳しい経済的、社会的環境は続いていた。週決めで給料を得ている記者もいたが、多くは書いた記事のスペース (コラム・インチ) によって報酬を支払われた。記者の仕事だけでは必ずしも生活に必要な金額が得られず、広告書き、法廷速記、日曜紙に記事を書くなど様々な副業に従事する者がおり、また本業でもスペースで収入が決まるため、しばしば記事に誇張や水増しが見られた。週給、出来高払いのいずれにしても、記者たちは鉛管工や植字工並みの給与水準に甘んじなければならなかった⁶。

一方、19世紀の最後の四半期に新聞業界における徒弟制度はすたれていった。四年制大学の卒業生たちが記者として採用されるようになり、そのようにして大学卒で記者として新聞の仕事を始めた者たちは編集長となっても、必ずしも発行人のようには株は保有しなかった⁷。

新聞自体を取り巻く経済環境も大きく変わってきていた。南北戦争終結に伴う巨大な全国統一市場の登場で商工業は飛躍的に発展し、1930年代のニューヨークでペニープレスとして登場した財政的に市場に依拠する新聞も本格的にビジネスとして展開しうるものに成長しつつあった。各地の新聞が資金を拠出して運営する AP 通信 (the Associated Press) は商品としてのニュースを扱うビジネスマンの団体であると宣言した⁸。新聞、雑誌の広告スペースはオープンマーケットの商品 (commodity) となり、新聞発行者たちは部数と刊行物の性格について十分かつ正確な事実を出すよう圧力にさらされるようになった⁹。

こうした日刊紙のさらなる商業化は、社会批評家たちとする記者たちに葛藤を与えた。米国ジャーナリズム史の記述に初めて社会文化史的視点を持ち込み、客観報道 (objectivity) 理念の生成過程について包括的説明を試みたシャドソン (Michael Schudson) によれば、報道 (reporting) とは19世紀末の発明であり、新聞制

作作業の分業化としての記者 (reporters) という新しい職業の出現は新聞の産業化への対抗だった¹⁰。記者が掘り起こすニュースが増加しているにもかかわらず、彼らは低賃金、気まぐれな解雇、低い名声と信望など最小限の社会的地位しか手にしておらず、ニュースへのシフトと政治党派からの独立は、新聞業のビジネス化への批判も相俟って、新聞の役割と記者の専門職化をめぐる業界内で議論を巻き起こした¹¹。

産業が発展し都市が成長していくにつれ、大都市の新聞はニュース提供者、都市生活の仲介者、コミュニティの社会的調停者として信頼を得るようになってきた。記者たちのほうも信頼と尊敬を求めて、都市問題、社会問題を解決に導く情報の提供者として社会の中での自らの役割を正当化していくようなところがあった¹²。シャドソンはこうした事情を当時、ニューヨークで大部数を獲得しつつあったワールド (the New York World) 紙を取り上げて説明している。

ワールドのような広く一般的な読者を求める新聞は都市生活者の変わりゆく経験、感覚、願望に応えた。これが新聞の娯楽 (entertainment) 機能拡大を意味した。同時にそれは都市で生きていくための助言集となるような新聞、という性格の拡張をも意味した¹³。

ある意味では、ピュリッツァーが開発したマス・ジャーナリズムは日常生活に目を向けるという、ペニープレスが起こした革命を単に拡大しただけといえる。しかし、日常生活自体がかつてとは変わってきていた。それは政治参加、読書、都市、アメリカ、めまぐるしく変化する社会的・地理的可動性に親しみはじめた人々の日常生活だった。人々は道徳的相談役を求めたが、聖書は新たに発展してきた都市の暮らしには合わなかった。新しいジャーナリズムこそがその需要に応えた。移民にしてユダヤ系、自らの力のみで成功を収めた男、ピュリッツァーとその新聞であるワールドが先導役となった¹⁴。

こうした記者たちによる新たな自己規定に力を

与えたのが、折りしも浮上してきた革新主義的思潮だった。革新主義とは19世紀末から20世紀初頭の米国で見られた改革志向の様々な運動、考え方の総称というべきものだが、有賀は簡潔に「19世紀末の産業社会化、都市化が生み出した様々なひずみに対する、自由、民主主義の理念の擁護のための回答」であり、「科学信奉、社会的地位の意識が強い」と定義している¹⁵。シャドソンは1880～90年代の新聞に関連して「都市や社会の病理の治療法は経験主義的正確さ、専門家の助言、事実に基づく情報によって見つかるというアメリカの信仰と事実の強調とは軌を一にする¹⁶」としているが、ここで言及されているアメリカの信仰がほぼ革新主義に相当すると言ってよいだろう。

論説に対するニュースの強調は社会的地位を高めた記者たちの思惑にも合致し、またかつての政治理念を商業・産業社会の現実に適合させたい人々に受け入れられ、革新主義の考え方にも合致した。ポーリー（John Pauly）はさらに進めて、『『ニュース』に関する公論、独立という考え方は、民主主義的理念を産業社会の諸条件に適合させることを米国人に許し、同時にかつての政治的理念と矛盾しない、商業ジャーナリズムの道徳的に純化されうる姿への信仰を表わした¹⁷』と指摘している。

カウルとマッカーズ（Arthur Kaul & Joseph P. McKerns）は1830年代のニューヨーク・ペニープレスについて、「新たなビジネス戦略（広告への依存）と新たなイデオロギー（政治的独立の主張）。経済危機を道徳的な言葉に、ビジネス戦略をプロフェッショナル・イデオロギーに翻訳するこうした米国の傾向が経済と文化のつながりを見えにくくする」と書いたが¹⁸、それから半世紀を経ての専門職化追求の動きにも示唆的な言葉である。産業化、都市化とともに新聞産業の巨大ビジネス化も進み、記者たちは厳しい経済的待遇と低い社会的地位の向上をも企図して、都市問題、社会問題の解決のために事実、情報を提供する専門家として新たに自らを規定していった。

低賃金と失業の危機を抱えた記者たちはまた、社会の中での彼らの役割を認知させるためにプレスクラブを組織した。自らを専門家であるとして、技能による自己規定を求めたのである¹⁹。

こうした記者の専門職化運動を生んだ背景、そ

の経緯については前述のように大筋で合意がすてになされている。しかし、その専門職化と緊密な関係が指摘される「プレスの独立」という、20世紀前半に生まれた客観報道に先立つ、重要な近代的ジャーナリズム理念の誕生の経緯とその意味するところの変遷、変容については、十分な合意が未だないように見える。

「プレスの独立というイデオロギーは政治抗争の激しさを最小化し、都市の新聞は公共の利益のために働き、南北戦争の分断を乗り越えナショナルユニティを象徴した」とのフォルカーツとティーター（Jean Folkerts & Dwight L. Teeter）の説明に典型的なように、「プレスの独立」理念はこうした記者の専門職化の文脈の中で登場してきたとされる。

しかし、現実に新聞やそれをつくる記者、編集者らが独立しているかどうかではなく、「独立したプレス」という理念とその意味するところこそが問題なのであれば、たとえば市場への経済的依拠によりそれまでの政治党派からの様々な資金援助への依存に終止符を打った1830年代、ニューヨークのペニープレスも独立を少なくとも標榜はしなかったのだろうか。プレスの独立という考え方ははたしていつごろ米国新聞史に登場し、それが意味するところはどのような変化を辿ってきたのか、それとも19世紀末に革新主義の影響下で生まれ、意味するところもほぼ不変なのか。

プレスの独立という、客観報道に先立つ近代的理念に関連しては、シャドソンによる先駆的な研究のほか、比較的最近ではカプラン（Richard Kaplan）による包括的な研究がある。この小論は、これらの研究を批判的に検討し、何が未だ答えられていないのか明らかにしようとするものである。

第1章 シャドソンによる社会文化史的説明

シャドソンはそれまでの予定調和的な革新主義的ジャーナリズム史観や単純な経済決定論を退け、1830年代、ニューヨークのペニープレスが初めて政治党派への依存から脱却し、それから1世紀の時を経た1920～30年代、人間の認識の十全さへの

信頼が揺らぐ中で逆説的に客観報道の理念が生み出されてきた経緯を包括的に説明してみせた。

客観報道登場前夜の1880～90年代の新聞については、シャドソンは情報（Information）重視とストーリー（story）重視の2つのジャーナリズム類型が見られることを指摘した上で、以下のようを書く。

情報ジャーナリズムだからといって、ストーリージャーナリズムよりも公正（fair）、正確（accurate）なわけではない。新聞における道徳上の分業は、抽象化というよりも、敬意を表される人間の能力とあまり敬意を払われない感情という能力との道徳上の分化と並行関係にある。情報は自己否定の、ストーリーは自己中心的気ままさの一変種である²⁰。

タイムズ（The New York Times）がより高次の（higher）ジャーナリズムとしてその地位を固めたのは、その社会構造における位置ゆえに自らの生活に最大限のコントロールが可能だった人たちの生活経験に適合したからである。タイムズの読者は相対的に独立的（independent）、参加者（participant）だった。それに対して、ワールドの読者は相対的に依存的（dependent）、非参加者（nonparticipant）だった²¹。

「中立（Neutrality）と客観報道は異なる」とするガルシア（Hazel Dicken Garcia）と同様²²、シャドソンは「世紀転換期、また1920年代末になっても、客観報道はジャーナリスト、ジャーナリズム批評家が使う用語ではなかった。事実こだわらない新聞は批判の対象となったが、それは客観報道ではなかった。情報への愛着は個人的な見方の主観性に対する大いなる不安に背かなかった」「事実重視は脚色も自明との思考と共存するものであり、客観報道とは異なる」と断ずる²³。

こうした議論の延長線上に、シャドソンは「事実の発見すら私心が関与したものであり、記憶や夢すら選択的で、合理性それ自体も関心や意思や先入観の尖兵であることがわかってきた。これが1920～30年代のジャーナリズムに影響を及ぼし、客観報道の理念が誕生した」「日々の一般記事を

書く記者たちはなお、事実の収集と提示という作業の価値を信ずる必要があった。彼らは自らの仕事を真摯に受け止め、また読者や批評家たちをしてそれを真摯に受け止めさせるような枠組みを必要とした。それこそが『客観報道』という理念が提供しようとしたものだった」「ニュース提供における主観性の克服が不可能であると広く受け入れられた、まさしくそのときに、主観性は不可避であるとみなされるに至ったからこそ、客観報道はジャーナリズムにおける理念となった」と結論づける²⁴。

シャドソンにおいては1930年代における客観報道理念の形成の説明に最重点が置かれるため、19世紀末の状況はあまり重要視されてはいないのだが、なお先のジャーナリズムの2種類の連続性を示唆する記述は注目に値する。別のところでは、シャドソンは「事実性（factuality）と娯楽の2つの理念。記者たちはこの2つを同時に採用したが、どちらか一方を強調するアイデンティティーを選ぶ新聞もあった」と説明している²⁵。

フォルカーツとティーターによれば、新聞はセンセーションリズムと娯楽から情報と事実追求（fact-finding）までの連続体に沿った様々な道を選択した。ハースト、ピューリッツァーの成功に便乗する新聞もあったし、伝統を墨守する新聞もあった。しかし、すべて彼らが奉仕するビジネスコミュニティのまぎれもない一部となった。すなわち、センセーションリズム、娯楽、情報、事実追求は連続的である²⁶。

シカゴデイリーニュースの創始者、編集長で、のち AP 通信支配人となった M. ストーン（Melville Stone）の次の2つの言葉もやはり2種類の連続性を示唆する。

新聞には3つの機能がある。情報を提供すること、解釈すること、そして愉しませること（to inform, to interpret and to entertain）²⁷。

彼（Adolph Ochs）はそのライヴァルたちに品位（decency）は商売としてやっていけることを教えた²⁸。

情報の提供と娯楽の提供は一つの新聞の中で共

存しうる、とのストーンの言葉に、ニューヨークタイムズを買収し、今日の隆盛の礎を築いた人物オックス（Adolph Ochs）の新聞編集・経営手法を重ねて見ていくと、連続性を備えた新聞のイメージが具体的に浮かび上がってくると言えるだろうか。

1890年代はピュリッツァーのワールドとハーストのジャーナル（the New York Journal）のニューヨーク2紙に体现される「ニュージャーナリズム」が脚光を浴びた時代である。しかし、その一方で1880年代後半はジャーナリストたちがかつてなく「事実」「リアリティー」に関わった時代でもある。ニューヨークタイムズ、シカゴトリビューン（Chicago Tribune）、カンザスシティスター（the Kansas City Star）などはピュリッツァー、ハーストの方策を非難し、かつ成功していた。

さて、初めて包括的なジャーナリズムの社会文化史を提示したシャドソンだが、その限界はカプランの次の言葉に集約されると言っていいたいだろう。

シャドソンは新聞の党派性が19世紀末まで続いたことを見落とし、ひとたびプレスが独立を達成するや、それは政治的絡み合いから自由なものとみなし、1900年以降、プレスが党から距離を置く現象、ジャーナリズムの諸理念の再構築について説明できない²⁹。

本小論の冒頭に引いたローソンの回想からもうかがえるように、新聞の党派性は確かに19世紀後半になっても続いていた。経済的に市場に依存することは、ただちにプレスの報道姿勢を変えるものではない。党派性を維持しつつ独立新聞よりも多くの購読者を集めた新聞もあった³⁰。シャドソンの（政党からの）プレスの独立をめぐる議論には欠陥があるとせねばならないだろうが、なお、19世紀末の2つのジャーナリズム類型と連続性をめぐる議論には傾聴に値するものがある。すなわち、ニューヨークタイムズやシカゴデイリーニュースのような、事実、品位をモットーとする新聞にもセンセーションナリズムの残滓は内在化されているのではないか。その意味での、ペニープレス以来のジャーナリズム理念の分裂性が、一種の転倒理念（理念的倒錯）としての客観報道の出現以前

に、散見しうるのではないだろうか。

第2章 カプランによる公共アリーナにおける政治とのせめぎ合い関係からの説明

カプランはデトロイトの主要紙の記事や編集長らの手になる書簡の分析から、新聞の党派性は19世紀末まで続いたことを明らかにした。シャドソンが半ば自動的に1830年代のジャクソニアンデモクラシー下で市場への依拠が可能になったことで党派性はただちに放棄されたと結論づけたのに対し、その後も半世紀以上にわたって経済的には政党から自立が可能になっても論調、メンタリティーの上では新聞の政党への帰属意識は必ずしも消えなかったことを実証的に示した。

半世紀のタイムラグについて、カプランは公共アリーナでのプレスと政治との対抗関係から説明する。

プレスは常に政治的側面を持つ。

1. ニュースの語りの日々のノルマをこなすにあたって、プレスはその日の最も重要な言葉や行為の公式、権威主義的説明を提示しようとする。ある部分でわれわれの現実を定義する「文化的焦点」として、ニュースは政治家にとって死活的に重要な「象徴的資源」に、不可避的になる。

2. 政治家、パブリックリレーションズ専門家、市民運動家らはプレスの説明、分析にケチをつける。それが自らに有利な報道につながるのを知っているからである。結果、記者の解釈は必然的に他のパブリックな団体、政治的組織と抗争状態となる。

3. ジャーナリズムは外部からの批判に対して盾となるようないかなる特別な属性も欠いている。ジャーナリズムはその商品をパブリックアリーナで売り、排他的権威を付与してくれるような専門職としての特質を一切持ち合わせていない³¹。

要するに、ジャーナリズムはライバル関係にある公権力と対決し、同時に外部からの批判から自由にニュースを報道することを可能

にするような、いかなる技術的正当化もできない。ニュース報道がマス・パブリックとエリートの双方に受け入れられるようにするために、メディアはより広い政治文化の諸規範に頼り、パブリックアリーナの「合法的」政治代表らの意見、声に合わせる。こうして、報道のための個別の出来事の選択及びジャーナリズムの最高レベルの専門家としての理想の定義の双方において、政治は根源的にニュースに影響を与える³²。

その上で、カプランは1890年代のプレスの党派性からの離陸について分析を続ける。

1894-1896年の選挙まで政党の圧倒的な力は衰えず、ジャーナリズムの叛乱の機会もなかった。1896年以降、民主党も共和党もその正当性と政治的資源のコントロールにおいて長期的低落を経験し、革新主義運動の「政党マシン」攻撃とも連動して、新聞は党から袂を分ち、その独立を確立した³³。

政党への忠誠からすべて解放されても、新聞は議論に満ちた公共アリーナから外に出られず、なお、ほかの政治的視点に直面して自らのニュース選択の正しさを論証する必要があった。そこで、プレスは革新主義改革運動において定式化された文化的諸理念から引き出すかたちで新たな職業倫理を創り上げ、ジャーナリストはその日起きた様々な出来事の事実らしい、権威ある、ニュースによる説明を提供する、公平な（impartial）専門的技術者として自己規定した。自らを公共の利益に奉仕し、政治の汚れからは超越したものであるとした³⁴。

カプランによれば、1896年大統領選挙で4党システムが成立、党が政治の中心から外れ、党の社会統合能力、すなわち政治的アイデンティティーや人々の忠誠を定義する能力が低下した。公共圏における党の能力がぐらついてくると、新聞の党派性を誘導するインセンティブと拘束力が急速に低下した。この新しい文脈が、新聞をして、党からの独立を宣言することを許した。新聞は公式の

パブリックコミュニケーションの手段を独占していたので、パブリックアリーナでの彼らの卓越を正当化する（報道の恣意性を隠蔽してくれる）説得力ある理由が必要だった。これが客観報道という新しい倫理を定式化させる土壌だった。そこに革新主義政治改革運動が起き、そのイデオロギーから新しい職業倫理にいくつかの要素を割り当てた。公共奉仕という理念はこのときに出てきたという³⁵。

これまでの先行研究では、この稀有な時期の「プレスの独立、中立、公共奉仕」という考えを生み出した社会的背景、要因については一定の説明が試みられているものの、19世紀末の新聞の記事や関係者の書簡、新聞の編集、広告、発行に関わる文書など、実際の史料に基づいてその意味するところを深く分析した研究はカプランのそれくらいしか見当たらない。

その意味では貴重な研究と言えるのだが、カプランにおいては、19世紀前半から半ばの時点における米新聞の党派性からの訣別や1920～30年代になっての認識をめぐるパラダイム上の転換の影響を受けての客観報道の考え方の形成というシャドソンの提起を批判的に検討することに重点が置かれており、また、19世紀末のジャーナリズムによる新たな理念の創出を主に政治との対抗関係で説明している。「革新主義の波が去った後に行政府に従順なプレスが生まれた³⁶」とのカプランの指摘は重要だが、革新主義の波が去ったからというより、むしろ、ジャーナリズムにおける革新主義の帰結そのものであったのではないか。カプランは政治との対抗関係を強調しすぎているきらいがあり、ジャーナリズムにより内面的な理由をも考察していく作業は意味があると思すべきだろう。

第3章 未説明の「独立」理念

カプランはプレスの政治的独立は1896年以降のこととするが、早くもその20年前にシカゴデイリーニュースは独立を標榜し、また他方でシカゴ・ジャーナリズム全般において党派性は20世紀に入っても続いた³⁷。そもそもプレスの独立（independ-

dence of the press) という語は1920年代から米国の新聞記事中に登場している³⁸。

まず、19世紀初頭以来のプレスにおける独立の理念の意味の変遷を解説することが必要である。その上で、プレスの独立という理念は1880～90年代の革新主義的思潮の高まりに乗って結晶化されてきたものだろうが、この客観報道に先立つプレスの近代的理念の背後に潜むもの、その実体を解明する作業が必要になってくる。

シャドソンにあってはプレスの独立とは、まず1830年代、ニューヨークの新聞が市場の発展に伴って政治党派への財政的依存から脱却したことを意味するが、単純な経済的独立だけでなく、ジャクソニアンデモクラシー下でのリベラル個人主義の進展に呼応するかたちで新聞の近代化も進んだとして、政治的社会的変容も視野に入ってきている。しかし、19世紀末の状況については、シャドソンは情報重視型の新聞には言及しても、プレスの独立が突っ込んで議論されることはない。

一方、カプランはプレスの独立を客観報道の前段階として位置づけ、かなり詳しい分析を加えている。客観報道とはプレスの独立の理念がさらに洗練された高尚な哲学であるとして³⁹、独立理念をのちに定式化されることになる客観報道理念の重要かつ中心的な構成要素ととらえた。プレスはその財政基盤を市場に求めることによって政治党派からの経済的独立は達成したが、政治・文化的な対抗関係はその後も続き、19世紀末から20世紀初めにかけて論調、メンタリティーの上でも独立がなされた後には、今度は肥大化した行政国家に取り込まれることになった経緯を、説得力あるかたちで説明している。すなわち、プレスの独立、客観報道は公共圏におけるプレスの機能を弱体化させ、機能不全に陥らせたのだ、と⁴⁰。しかし、そのカプランにあってはプレスの独立理念は重要視されてはいるものの、まさに前段階と位置づけられているゆえにか、19世紀を通じての含意の変遷やとりわけ19世紀末から20世紀初頭にかけて革新主義イデオロギーに支えられてのその理念の生成過程、意味の変容については分析が不十分とせざるを得ない。

革新主義的歴史観によれば、ジャーナリズムは政治的独立と客観報道に向けて一連の段階を進化してきた。政党補助金に見切りをつけ市場の商業

的利益を取ったとのバルダスティー (Gerald Baldasty) の理論は革新主義的歴史観の単純な裏返しであるが⁴¹、大井の言うようにアメリカジャーナリズム自体が一貫して革新主義的な思想に裏打ちされているとすれば⁴²、米国発で世界のスタンダードとなった革新主義的ジャーナリズム理念の裏に潜むものを明らかにする作業は意味のあることであろう。手がかりとなるのは先に検討した19世紀末ジャーナリズムの2種類の連続性である。

1830年代、ニューヨークで出現したペニープレスは、犯罪ニュース、ローカルニュースに焦点を当てて政治・ビジネスエリート層に対して挑戦し、移民、中産層といった大都市の成長しつつある住民層を擁護する報道を展開した。記事および売薬などの広告の両面におけるセンセーショナリズムの一方で、犯罪報道を通じて万人に対する平等な正義の実現や労働者の諸権利の保障を企図する側面があった。しかし、同時にそうした自らの企図を否定するように、労働運動とたたかうために私的所有権の価値を擁護もした⁴³。ペニープレスはその紙面、さらには存在自体が、ある種の分裂症の相貌を帯びている。巨大な広告市場の登場で実現した政党からの経済的自立は、自動的に論調における党派性の放棄をもたらしたわけではなかった。ペニープレスはそれまでの、誰に経済的に依存し、誰の声を代弁するか旗幟鮮明であったジャーナリズムから訣別して、良きにつけ悪きにつけ社会的立脚点の曖昧な、一種、幽霊のようなジャーナリズムをつくり出した⁴⁴。

1890年代のニューヨークでは、ペニープレスの子孫たちはいわゆるイエロージャーナリズムと事実追求型の新聞の2つに分化した。しかし、両者は一見相反する容貌の下、深いところで根が通い合っているように見える。かつての祖先に回帰するように、ともに1ペニーに値下げをして読者を増やした。移民、労働者層を主たる読者とする前者が部数を伸ばしたのは言うまでもないが、後者も値下げで高級紙としての評判を落としたというよりも、逆に部数増で広告媒体としての価値を高めた。

祖先と同様、分裂症気味の性格も2つの新聞類型で共有されている。前者の中には女性向けのページをつくってやはり部数増を企図したものがある

が、女性の政治的、社会的地位向上には冷淡で、消費活動の主役としてのみに注目した⁴⁵。後者は部数、広告に敏感な体質を抱えつつ品位ある紙面づくりを行い、記者や新聞自体の地位、評価を高める意図もこめて、やがてプロフェッショナリズムを追求していった⁴⁶。のちのマックレイカーの先駆のように、また祖先がエリート支配層に対して反逆を試みたように、前者はもちろん、ビジネスエリート層に仕える後者の一部でも、大都市の市政からの汚職追放キャンペーンが展開された。センセーショナルリズムも事実追求も排他的な関係ではなく、むしろ連続性が散見されるというべきだろう。

分裂症の性格はおそらく何よりもビジネスモデルの変化とそれに伴うアイデンティティの喪失から来ている。19世紀を通じての産業（商工業）社会化の進展と農村から都市への大規模な人口移動、新たな移民の流入と大都市の成立は、ニューヨークを皮切りに米国各地の新聞を政党への財政的依存から解放していった。購読収入と広告収入の2本柱からなる、市場にほぼ全面的に依存する新聞が東部から中西部、太平洋岸へ、大都市から各地の中心都市、そして小さな町へと伝播するように誕生していった。しかし、新しいビジネスモデルの成立はただちに新しいジャーナリズムモデルを生み出すには至らなかった。19世紀末、新聞のさらなる商業化は記者たちに葛藤を与え、そのビジネス性の徹底に対抗するように、出自を1830年代ペニープレスに遡る記者という新たな職業の徹底化、純化、専門職化を図っていた。

19世紀末、1880,90年代の米国には、都市の病理は専門家の経験主義的知や情報により現実的、具体的に治癒できるとの革新主義的思潮が早くも現れてきていた。前述のように事実追求型の新聞が中心となってジャーナリズムの専門職化が進められていくが、19世紀末、ニューヨークジャーナリズムにおけるセンセーショナルリズムの旗手であったニューヨークワールドのビュリツァーのように後年、専門家としてのジャーナリスト養成を説く者もあった⁴⁷。ペニープレスに淵源し、イエロージャーナリズムと事実追求型新聞の両者に共犯関係のように分かち持たれた分裂症的な性格、すなわち、部数増・広告増追求の商業主義と大衆新聞のセンセーショナルリズム、事実追求型新聞が看板

にした品位の共棲を隠蔽し、“野合”を可能にしたのは、こうした革新主義の波に乗っての専門職化の追求ではなかったろうか。19世紀末、米国の新聞は党派性の強い新聞から離陸（政党補助金から経済的に独立）、市場に依存しつつ特定の党派との関係を最小にすることで大部数を実現し、同時にセンセーショナルリズムを売り物にする新聞も事実追求型の新聞もともに、折りからの革新主義の追い風にも乗ってそれぞれの読者たちに変わりゆく大都市での生活の相談役や社会問題解決のための事実、情報を提供する存在、と自らを規定した。少なくとも世界に先駆けて、また世界の中で例外的に米国において100年あまり前に生まれ、成長してきたジャーナリズムの専門職化には、分裂病的性格の隠蔽と自らの正当化という負の側面が散見されるというべきではないだろうか。

19世紀末の革新主義的思潮が立ち現れてきた時代に、「プレスの中立、独立、公共奉仕」という理念はどのような社会的諸条件のもとで、どのような意味と役割を付与されつつ構築され、どのような決定的変容を今日の米国ジャーナリズムにもたらしたのか。プレスにおける党派性が強く、20世紀まで続いた、同時に最も典型的なかたちで記者の専門職化への動きも見られたシカゴ・ジャーナリズムは、問題を考える際のショーケースともいべきものであり、とりわけ大衆紙と品位ある新聞の2つの性格を併せ持つかの地で初のペニープレスであるシカゴデイリーニュースと活発な専門職化運動の舞台となったプレスクラブ・オブ・シカゴに関わる史料の分析は、こうした問いへの接近に有用と考えられる⁴⁸。

プレスの独立、中立という原理は市場への依存で実現した政党への従属により自動的にもたらされたものではなく、自らの理論武装のためのイデオロギーとして発明された。ペニープレスに見られる社会的立脚点の曖昧さ、浮遊するジャーナリズムとしての性質は、相反するイエロージャーナリズムと事実追求ジャーナリズムの2類型に分化し、後者がスタンダードとなって克服されたかのように見えるが、実は2つは深いところで根を同じくする連続的な存在であり、ペニープレスの折衷性を極大化し、決定的にし、今日のジャーナリズムが抱える二重性、分裂性の直接の祖先となったのではないか。2つは混在化し、今日まで存続

しているのではないか。18～19世紀的な政治党派への忠誠と20世紀的な行政政府への追従との間には、革新主義に後押しされたプレス自身による「独立」への動きがあった。客観報道以前に登場したこれこそが近現代ジャーナリズムの最大の地下水脈ではないだろうか。

19世紀末、米国ジャーナリズムの両義性には、今日の世界のジャーナリズムをとらえて離さない病の源が隠されているように見える。

[注]

- 1 Charles H. Dennis, *Victor Lawson: His Time and His Work* (Whitefish, MT.: Kessinger Publishing, 2007), p.30.
- 2 *Ibid.*, pp. 31-32. 教師である自分の妻を中傷した校長と揉み合いの末、殺害した弁護士的事件はシカゴの歴史でも最もセンセーショナルなものだったが、容疑者に対する暴力的な非難をする新聞もある中、Chicago Daily News は判断を法廷に委ねるよう人々によびかけ、分別ある市民の尊敬を得た、とのエピソードが紹介されている。
- 3 *Ibid.*, pp. 137-138.
- 4 ユリッツアーの新聞のセンセーショナルリズムはニューヨークジャーナリズムに初めて登場したのではなく、犯罪・スキャンダル・上流社会などなどのローカルニュース重視はベニープレスの伝統。こうした問題に焦点を当てることは1880年代までのニューヨークの主要紙に典型的だった。Michael Schudson, *Discovering the News: A Social History of American Newspapers* (New York: Basic Books, 1978), p. 95参照。
- 5 今日、高級紙の代表のようにいわれる the New York Times ももともとはベニープレスだった。同紙は Adolpf Ochs による買収の2年後の1898年、3セントから1セントに値下げをして初めて部数を大幅に伸ばした。Schudsonによれば、the Timesの成功の秘訣はそのニュース報道、正確さではなく decency を強調したこととこの値下げである。*Ibid.*, pp. 109-110参照。
- 6 Jean Folkerts and Dwight L. Teeter, Jr., *Voices of a Nation: A History of Mass Media in the United States*, 4th ed. (Boston: Allyn & Bacon, 2002), pp. 274-275.
- 7 *Ibid.*, p. 275.
- 8 Daniel Czitrom, *Media and the American Mind* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1982), p. 27.
- 9 Daniel Boorstin, *The Americans: The Democratic Experience* (New York: Random House, 1973), p. 150.
- 10 Schudson, *op. cit.*, p. 88.
- 11 Folkerts and Teeter, *op. cit.*, p. 274.
- 12 Folkerts and Teeter, *op. cit.*, p. 254.
- 13 Schudson, *op. cit.*, p. 102.
- 14 Schudson, *op. cit.*, p. 106.
- 15 有賀夏紀『アメリカの20世紀<上>1890年～1945年』中央公論新社、2002年、pp. 79-82。
- 16 Folkerts and Teeter, *op. cit.*, p. 254.
- 17 John Pauly, "The Ideological Origins of an Independent Press," unpublished paper presented to the American Journalism Historian Association, Las Vegas, Nev., October 1985, pp. 4, 8.
- 18 Arthur Kaul and Joseph P. McKerns, "Long Waves and Journalism Ideology in America, 1835-1985," unpublished paper presented to Association for Education in Journalism and Mass Communication, Memphis, Tenn., August 1985.
- 19 Folkerts and Teeter, *op. cit.*, p. 276.
- 20 Schudson, *op. cit.*, pp. 118-119.
- 21 Schudson, *op. cit.*, pp. 119-120.
- 22 Hazel Dicken Garcia, *Journalistic Standards in Nineteenth Century America* (Madison: University of Wisconsin Press, 1989).
- 23 Schudson, *op. cit.*, p.120.
- 24 Schudson, *op. cit.*, pp. 121-159.
- 25 Schudson, *op. cit.*, p. 89.
- 26 Folkerts and Teeter, *op. cit.*, pp. 252-253.
- 27 Melville Stone, *Fifty Years a Journalist* (Garden City, N. Y.: Doubleday, Page & Company, 1921), pp. 53, 107.
- 28 *The New York Times*, September 19, 1926.
- 29 Richard L. Kaplan, *Politics and the American Press: the Rise of Objectivity, 1865-1920* (Cambridge, U.K./New York: Cambridge University Press, 2002), pp. 11-12.
- 30 Kaplan, *op. cit.*, p. 9.
- 31 *Ibid.*, pp. 3-4.
- 32 *Ibid.*, p. 4.
- 33 *Ibid.*, p. 16.
- 34 *Ibid.*, p. 16.
- 35 *Ibid.*, pp. 190-191.
- 36 *Ibid.*, p. 194.
- 37 John Bekken, "Politics and the Media," Encyclopedia of Chicago (Chicago: Newberry Library, 2004).
- 38 1824年10月7日発行の National Intelligencer (Washington D. C.) に "independence of the press" の語が登場している。
- 39 Kaplan, *op. cit.*, p. 184.
- 40 Kaplan, *op. cit.*, p. 191-194.
- 41 Gerald J. Baldasty, *The commercialization of news in the nineteenth century* (Madison: University of Wisconsin Press, 1992).
- 42 大井真二「メディア・ジャーナリズム教育——日米を

中心に——」津金澤聡廣、武市英雄、渡辺武達編『メディア研究とジャーナリズム 21世紀の課題』ミネルヴァ書房、2009年、pp. 306-307。

- 43 Dan Schiller, *Objectivity and the News: The Public and the Rise of Commercial Journalism* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1981).
- 44 「ニュース」とはペニープレスの発明とされる。それまでの6セント新聞の publishers は多く printers 兼任であり、船長の手紙、法律文書、選挙関連情報など入ってくる情報を活字にした。対して、ペニープレスは取材、インタビューを行い、自ら情報を探し求め記事にした。警察裁判所の軽犯罪記事にはセンセーションナリズムも散見されるが、論説重視のそれまでの新聞にはない「事実重視」の側面も見られる。Schudson のいうペニープレスの「日常生活の注視」にはすでに、分裂的な2側面が内包されていた。
- 45 Schudson, *op. cit.*, pp. 99-100. 事実重視型の Chicago Daily News も夕刊紙としての特性を活かして、いち早く女性向けページを新設、部数を伸ばしたが、論調のほうは依然、女性の社会進出には消極的だった。
- 46 professional 化運動の一環で各地に social clubs としての press clubs が創られた。1880年創設の Press Club of Chicago はその代表だが、Chicago Daily News の Lawson, Stone や Chicago Tribune の Joseph Medill ら事実重視型の新聞人が多く参加した。
- 47 Pulitzer がジャーナリズム教育と reporters のプロフェッショナル化の必要性を説いた事実もまた、2つのジャーナリズムの連続性を示唆するものといえるのではないか。いうまでもなく、その必要性は事実重視の新聞関係者らが力説したものである。
- 48 Chicago Daily News の publisher/editor である Victor Lawson はその紙面、書簡で繰り返し、「プレスの独立」を説いている。たとえば、1888年5月16日、Lawson の手になる editorial は「Daily News は impartial, independent なアメリカの新聞であり続ける。その最高度の志は週当たり100万の読者にすべてのニュースとそれについての真実を提供する」と宣言。1888年大統領選に際しては、「independent な新聞にして、popular enlightenment のメディアはバイアスなしで大統領選キャンペーンのすべてのニュースを提供するだろう」と表明。また、1881年創刊の Daily News の姉妹紙である Chicago Record について、The Fourth Estate 誌発行人に宛てた1896年6月9日付けの手紙では「Chicago Record はシカゴで唯一の1セント朝刊紙だった。そのころまではっきりと民主的な団体はなく、independent な新聞である Record は当然に、民主的な政治団体を支持する民主的な読者層を魅きつけた」と言明している。

[主要参考文献]

- Baldasty, Gerald J. *The Commercialization of News in the Nineteenth Century*. Madison: University of Wisconsin Press, 1992.
- Boorstin, Daniel. *The Americans: The Democratic Experience*. New York: Random House, 1973.
- Czitrom, Daniel. *Media and the American Mind*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1982.
- Dennis, Charles H. *Victor Lawson: His Time and His Work*. Whitefish, MT.: Kessinger Publishing, 2007.
- Folkerts, Jean and Dwight L. Teeter, Jr. *Voices of a Nation: A History of Mass Media in the United States*, 4th ed. Boston: Allyn & Bacon, 2002.
- Garcia, Hazel Dicken. *Journalistic Standards in Nineteenth Century America*. Madison: University of Wisconsin Press, 1989.
- Kaplan, Richard L. *Politics and the American press: the rise of objectivity, 1865-1920*. Cambridge, U.K. /New York: Cambridge University Press, 2002.
- Kaul, Arthur and Joseph P. McKerns. "Long Waves and Journalism Ideology in America, 1835-1985," unpublished paper presented to Association for Education in Journalism and Mass Communication, Memphis, Tenn., August 1985.
- McGerr, Michael E. *The Decline of Popular Politics: The American North, 1865-1928*. New York: Oxford University Press, 1998.
- Nord, David Paul. *Newspapers and New Politics: Midwestern Municipal Reform, 1890-1900*. UMI Research Press, 1981.
- Pauly, John "The Ideological Origins of an Independent Press," unpublished paper presented to the American Journalism Historian Association, Las Vegas, Nev., October 1985.
- Schudson, Michael. *Discovering the News: A Social History of American Newspapers*. New York: Basic Books, 1978.
- Schiller, Dan. *Objectivity and the News: The Public and the Rise of Commercial Journalism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1981.
- Smith, Jeffery A. *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*. New York: Oxford University Press, 1990.
- Stone, Melville. *Fifty Years a Journalist*. Garden City, N. Y.: Doubleday, Page & Company, 1921.

有賀夏紀『アメリカの20世紀<上>1890年～1945年』中央公論新社、2002年

津金澤聡廣、武市英雄、渡辺武達編『メディア研究とジャーナリズム 21世紀の課題』ミネルヴァ書房、2009年

橋本 晃（はしもと あきら）

所 属 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程